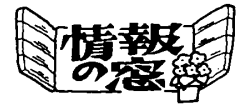


第37回シンポジウムルポ



時永 祥三 (九州大学経済学部)

本年度の春季研究発表会に先立ち、4月1日(火)の午後、九州大学経済学部の会議室において第37回シンポジウムが開催されました。現在まで経験のないシンポジウムを企画することとなり、また、年度当初で行事が重なることもあり、多少不安でしたが、講師の方々、参加者のご協力により無事終了できました。

今回のシンポジウムでは、九州らしい特徴を出そうということで、「地域活性化の新しい流れと展望」というテーマで、5つの講演をお願いし、政策レベルあるいは民間からの現状と課題についての提言をいただきました。

最初の講演は、加藤茂樹氏(日本開発銀行福岡支店)の「九州における地域活性化の課題と展望」であり、地域経済から見た九州地域の現状分析と、アジアなどの連携の可能性などの提言をいただきました。GDPでは韓国、オランダに匹敵する大きさにありながら、従来からそれぞれの県が独自の経済圏を形成して相互連携が不足しがちであった点が指摘されると同時に、福岡県への一極集中が進む中で異なる様相を呈していること、どの地域でも深刻な問題である高齢化のテンポが急速に進んでおり早急な対策がとられないと経済活力にも影響することが指摘されました。また、自動車やIC産業などハイテクに属する産業も定着する傾向

にあるが、研究開発機能などの不足により空洞化の危険性を常に抱えている問題もあげられました。このような中で、福岡や北九州など北部九州への産業の集積拡大などの新しい動きがあり、米国の大学と企業との連携をモデルとして、新しい産業が起こる可能性が述べられました。

講演の第2番目は、野見山薫氏(筑豊地域づくりセンター副理事長、㈱ドルフ社長)による「住学協同機構筑豊地域づくりセンターと筑豊ゼミ-筑豊での地域づくり活動グループの10年目」でした。10年前にこの活動は開始され、筑豊地域25市町村の住民の自主的な運営により、ゼミ形式で地域づくりへの調査・研究・提言がなされ、800名の卒業生を出している経過が報告されました。この間、行政側から講師をまねいて討論を行うほか、当地で開催された学会でも発表が行われました。筑豊地域は言うまでもなく旧産炭地であり、地域振興の財政投入はなされたものの、かえって依存体質を残すこととなり、これを脱皮するための人作りを住民の手で進めることに主眼が置かれました。活動はユニークなものであり、内閣官房賞を受賞するまでになったことが紹介されました。

第2番目は、古田龍助氏(熊本学園大学商学部)による「経営戦略論の観点から評価する九州地区の過疎地域活性化策」でした。講演では、多くの過疎地域対策が平準化されており、財政投入もバラバラであり民間企業と比較して非効率であること、成功している自治体は競争優位の戦略をとっており、地域の特徴を最大限に生かしていることが報告されました。特に、多大な財政が投入されながら過疎に歯止めがかからない理由は経済活動(所得)にあり、これを改善する政策がとられない限り一



時的なものに終わることが指摘されました。講演では、パソコンによりビジュアルなデータと映像の紹介があり、参加者は地域の現状をより理解できたように思います。

第4番目は、尾野徹氏（ハイパーネットワーク研究所、(株)鬼塚電気社長）による「ハイパーネットワーク社会をめざして」でした。主として大分県でのネットワーク「コアラ」の発足から現在までの経過、および通産省の研究機関として設立されたハイパーネットワーク研究所における活動などが紹介されました。従来のキャプテン、企業データベースなどが、企業の紹介に終わってしまい、ネットワークの利点を生かしていないのに対して、相互の電子メール交換が会員の参加を促す大きな動機となったことが述べられました。企業や自治体が管理するものに対して、市民が管理する地域ネットワークの成長力は大きなものがあるが、し

かし、いったん事業としてメドがつくと東京の民間企業の力には太刀打ちできない面もあり、地域の抱える問題を披露されました。

最後の講演は、海老原靖也氏（(株)NHV ホテルズインターナショナル常務取締役）による「テーマパークおよび高級リゾートホテルの経営戦略と展望」でした。テーマパークのハウステンボスが当初の一時的な構想からエコロジーを重視する計画へと転換された経過、経営戦略の面からまずブランドを確立して、これに連動して供給メニューへの関心を高める方向（ブランド戦略）などが紹介されました。また、ホテル従業員の人的サービスや研修、花のアレンジメントなどのソフト面（ヒューマンウェア）での特色がかなり重要であること、結果として全国でもトップクラスの収益性を実現できていることなどが指摘されました。

平成9年度春季研究発表会ルポ

前田 博(九州工業大学)

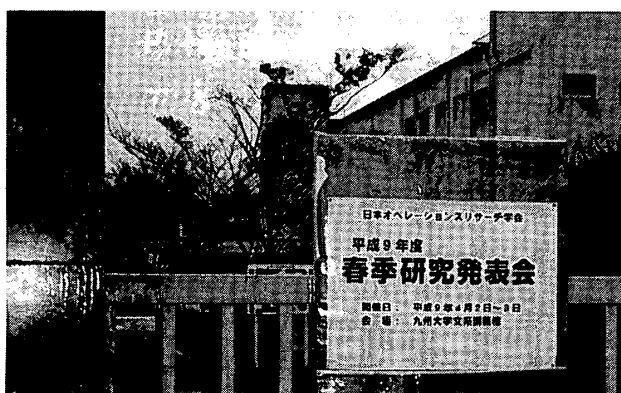
1. はじめに

平成9年度春季研究発表会は4月2日、3日の両日にわたり、現在日本一元気な町と言われている福岡市の九州大学箱崎キャンパスで行われた。天候は、昨日までの花見日和から一転して雨となり、急遽ストーブを持ち出すなど、実行委員会を慌てさせることになった。

今回の特別テーマは「ゆとりある都市生活とOR」

で、都市開発の視点が、機能中心から都市の暮らしやすさ中心へと移っていく中でのORの役割を問うものであった。1年前にオープンしたキャナルシティ博多はまさに、人間の感性的な暮らしやすさを追い求めた新感覚の都市開発の事例で、本発表会では特別テーマ、特別講演、見学会とすべての企画がキャナルシティに関連づけられていた。

研究発表は113件あり、その内訳は、特別セッション「ゆとりある都市生活とOR」9件、「製造業における



会場入口



談話室風景